



KUBUKSHA

読者へのお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙にはご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九

光文社出版局

神吉晴夫

長編推理小説 長い長い眠り

昭和35年9月30日 初版発行
昭和35年11月1日 8版発行

¥ 180



著者 結城 昌治
東京都渋谷区代々木3-46 神宮荘6号

発行者 神吉晴夫

印刷者 山元正宜
東京都文京区柳町26・三晃印刷

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(美行製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Syôzi Yûki 1960

長い長い眠り

結城 昌治



日本財団支援

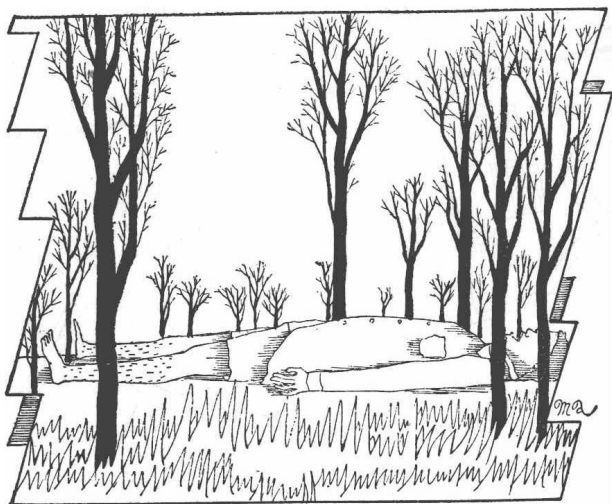
笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



明治神宮外苑略図

さしえ・真鍋ひろし



目次

Ⅵ	死体のあるエピローグ	211
Ⅴ	金魚	174
Ⅳ	デモ	135
Ⅲ	親展	92
Ⅱ	時雨 しぐれ	45
Ⅰ	死体のあるプロローグ	5

I 死体のあるプロローグ

1

明治神宮外苑、絵画館の上に月がのぼった。

オレンジ色の、まるい小さな月である。月かげは花崗石に表装された絵画館の円塔を明かるく照らし、周囲をかこむ雑木の葉群れの間からも、白いひかりを地上に降りそそいだ。

その白いひかりの中に、男は仰向けに横たわっていた。両足をながたと伸ばして、静かに眠っているようにも見えるし、深遠な瞑想にふけているようにも見える。年輩は四十五、六であろう。黒縁のロイドメガネをかけて、鼻下には細い口ひげをたくわえていた。

林のすぐ外は、信濃町から千駄ヶ谷駅前をぬけて、明治神宮参道へ向かうアスファルトの広い道路が走っている。自動車の往来のはげしい通りであるが、そのヘッドライトの強いひかりは、草の茂みに遮られて、横たわっている男を照らすことはなかった。ヘッドライトの黄色いひかりは、雑木の黒い幹を舐めるように照ら

しては消えていった。

静かな夜である。

風が少し吹いていた。

2

信濃町駅の改札口を出ようとして、向こうからやってきた女を目にしたとき、カオルは無意識のうちにその女を避けたいという心が働いた。しかしカオルが顔をそむけようとしたとき、すでに二人の視線は互いを認めあっていた。

「あら。」

最初にことばを発したのは、相手の女だった。女はカオルを見て、一瞬こわばった表情になったが、すぐに明かるい笑顔を取りもどした。

「今、お帰り？」

女が言った。

「ええ。」

カオルははにかむように頷いた。なぜはにかんだのか。カオルはそのような自分が気にいらなかった。そして自分に抵抗するかののように、顔をあげた。

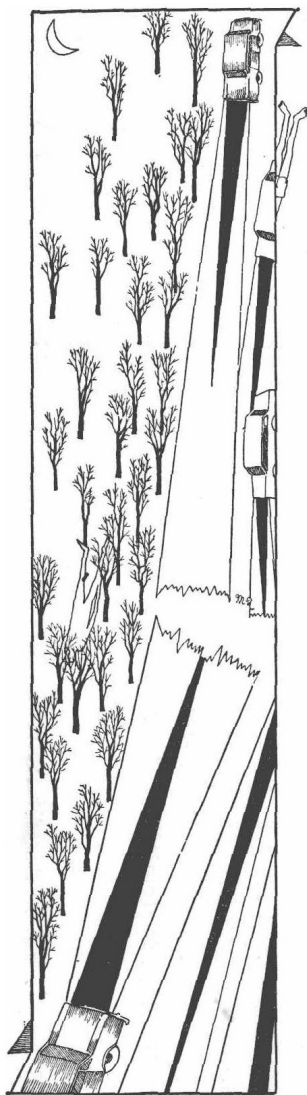
「いつも父がお世話になっております。」

カオルは言った。皮肉のつもりだった。

「慶応病院にはいつているお友だちを、お見舞いに行ってきたところなの。つい話しこんで、遅くなってしまうしたわ。」

女はカオルの皮肉にとり合わなかったが、それは何かを弁解するように聞こえた。

榎本胡蝶、父の愛人である。「ひさご」という新宿の小料理屋へ父に連れられて行き、初めて胡蝶に紹介されたときから、カオルは彼女が嫌いだった。理由は自分にもわからない。亡くなった母のために、カオルは父を憎んでいたし、継母の三輪子に対しても親しみを持たなかったから、両親への感情が本能的に胡蝶を嫌わせたと見ることは軽率であろう。彼女が自分よりも美しいからか。それは確かに、カオルが胡蝶を嫌う理由の一



部になっていたかもしれない。カオルの中の女は、あきらかに胡蝶のととのった顔だちと、透き通るように白い肌を嫉妬^{しと}していた。しかし、嫉妬と嫌悪感とは異質なものだ。

——不潔だわ。

初めて会った胡蝶の印象を問われたとき、カオルは父に対してそう答えた。汚れたことのない少女だけが持っている、鋭い触覚のとらえた印象だった。その理由を、カオルは考えなかった。

カウンターの向こうに立って、おかみとかママさんとか呼ばれている美しい女が、父の新しい愛人であると感じたとき、カオルは継母に対する残忍な喜びを味わった。カオルは初対面の胡蝶を嫌ったが、継母の三輪子はさらに嫌いな女だった。嫌いな者同士の間を想像することが、カオルには愉^{たの}しかった。彼女は時おり父に連れられて、胡蝶のいる「ひさご」へ通った。三輪子と四度目の結婚するときもそうであったように、娘を愛人のもとへ連れていくことは、父が新しい愛人との結婚を^{はか}っているからにちがいない。カルオがそう考えることは自然だった。胡蝶と向かい合っているときの父は、いかにも幸福そうに見えた。その父のとなりに腰をかけ、カオルはおきまりのオレンジジュースを前に、父と胡蝶との会話を黙って聞きながら、父と継母との不和が決定的な破滅に落ちる日を、クリスマスを待つような気持で待っていた。

「しばらくだわ。お茶を飲みましょう。」

胡蝶はカオルを喫茶店へ誘おうとした。

「でも——」

カオルはためらった。カオルは胡蝶と二人で、親しく話し合ったことがない。いつも冷たい傍観者として、

父と胡蝶との交渉を眺めていた。今、彼女の誘いにつてしまうことは、自分の椅子を降りて、彼女と同じソファにすわってしまうことになる。カオルはあくまでも、父と彼女との外側に離れていなければいけない。それが亡くなった母への義務であり、自分に課したゲームの掟でもあった。

「遅くなると、父が心配しますから……。」

カオルは腕時計を覗いてから言った。

「そう。せっかくお会いできたのに残念ね。」

胡蝶はあんがいあっさりとは断念した。少しも残念そうではなく、むしろ緊張から解放されたときの、ほっとしたような表情が浮かんだ。

明かるい紺無地のお召に、錆朱の単帯をきりつと締めつけた胡蝶の後ろ姿が、改札口の向こうに消えた時、カオルもまた、何か安堵に似た気持を覚えた。

しばらくだわ——、と胡蝶は言ったが、そう、最近一ト月ばかり、カオルは彼女に会っていないかった。ないでいれば、さして気にかかる相手ではなかったが、会えば好奇心をそられる女だった。

いつもの胡蝶ではない。粋な和服姿も、誘い込むような明かるい愛想笑いも、カオルの、それでいて、いつもの胡蝶とは違っていた。一つの身ぶり、一つの微笑にも、硬く

た。そこが小料理屋の片隅ではなく、カオルのとなりに父の姿が見えなかったからだ。

カオルは都電の線路をわたり、慶応病院の石垣沿いに帰宅を急ぎながら考えた。

慶応病院に友人を見舞ったという胡蝶のことは嘘にきまっている。夜の九時近

されるはずもないし、夜の忙しい仕事を持つ彼女が、そんなに遅くまで話し込んで、納得できない。なぜ彼女は、目先の見えた嘘をつく必要があったのか。自宅に近い信濃町ふさわしくない。それは用心深い父にも似合わないことだ。それならばなぜ、彼女はカオルの疑問は同じところにもどってくる。疑問は暗く閉ざされ、その先にひかりは見カオルはおもしろいと思った。ことばは何かを表現するためではなく、時として何かを胡蝶の隠そうとしたことは何か。家に帰ったら、今夜のことをさっそく父に話してやろう。色を見れば、何かがわかるかもしれない。カオルは足を急がせた。足を速めながら、ふと、カオルは返った。誰かに尾けられているような気がしたからだ。ずっと後ろの方を、若い恋人同士らしい二人がめつくりと歩いている。怪しそうな人物はいない。タクシーが一台、明かるいひかりを撒きちらして追い越していった。外苑の森は、黒い影になって眠っている。気のせいだったらしい。赤い手提鞆を持ちかえて、カオルはもう後を振り向かなかった。

3

『御注意』

外苑内の散歩者をねらう犯罪が多くなってきましたから、お互いに気をつけてください。

四谷警察署・神宮外苑部』

外苑の遊歩道路に沿った芝生のところどころに、こんな立札が立っている。無風流とはいえ、これも夏の風物である。暗い木陰の下に、夏の夜を愉しむ恋人たちが多くなると同時に、彼と彼女との睦み合う現場を襲つて、金品を恐喝する連中が跳梁するのだ。なかには、恍惚と抱き合っている恋人同士の身辺に忍び寄り、傍らの芝生に投げ出してあるハンドバッグなどを、無言で頂いて消える手合いも珍しくない。外苑内のパトローは、特に細心の注意を要求されていた。立札は恋人たちへの警告である。

だが、パトロールに出た阿部巡査はこの立札を見るたびに『——お互いに気をつけてください』とはどういうことなのか、と考える。お互いの意味がわからないのだ。まさか被害者と加害者という意味ではあるまい。外苑の散歩者は何もアベックばかりとは限らないのだから、恋人同士お互いというようにも解しにくい。あるいは、散歩者全員に対する呼びかけのつもりなのだろうか。どうでもいいことだが、彼は立札の文句が気になった。

国立陸上競技場の鉄柵沿いに歩いてきた阿部巡査は、広い舗道を渡り、絵画館うらの林にはいって、右手の懐中電灯をととした。一条の黄色いひかりが、淡い月明かりを貫いて、闇の奥を照らす。人影はない。阿部巡査は今日が日曜日だったことを思いだす。ウィークデイ、特に土曜の夜は人出が多いが、日曜日はいつも閑散なのだ。利用者にサラリーマンが多いせいである。若い阿部巡査にとって、土曜の夜のパトロールは楽ではない。風紀上しばしば黙認しがたい光景に出会うからだ。そんなときは無料と知りながらも、軽く注意を促す。こそこそと身じまいをして逃げ出す者もいれば、逆にくっつかかる者もいる。初めのころは好奇心もあったが、仕事となれば楽ではない。しかし今夜は日曜日、あたりに人影は見えない。阿部巡査は雑草の茂みを分

け、松、檜、櫟などの下枝をくぐって、ゆっくりと歩いた。この林をぬけて、舗道を隔てた遊園地を一巡すれば、駅前の派出所にもどって一時間の休憩がとれる。少し眠気がさしてきた。阿部巡査はアクビをする代わりに、懷中電灯を大きく振った。

と――、大きく流れたひかりの中に、一瞬人間の姿らしいものが白く浮かんで消えた。阿部巡査はその姿に気づいた。視線を凝らし、闇に吞まれた白い形をもとめて、懷中電灯を強く握った。光の輪が、注意深く地上を回った。

――酔っぱらいかな？

阿部巡査は最初そう思った。

家人の心配をよそに、酔って寝込んだものとすれば、起こして帰宅させることも警察官の職務である。阿部巡査は近づいてみてびっくりした。

南天の葉陰にかくれるように、男が仰向けに寝そべっている。上衣は着ていないが、白いYシャツにネクタイをきちんと締めている。ただし下半身は、パンツ一枚の男だった。度の強そうな黒縁のメガネ、鼻下には細い口ひげをたくわえて、人相は一見重役ふう。両手両足を同じ方向へまっすぐ伸ばして、酔って寝込んだにしてはあまりに姿勢のいい寝姿である。南天の葉陰から出た下半身だけが、淡い月光を浴びていた。

それでも、阿部巡査は男が死んでいるとは思わなかった。むしろ相手の女が近くにいて、樹陰に隠れているのではないかと、あたりを見回したくらいだった。

「もしもし。」

阿部巡査は声をかけ、パンツから出た裸の脚を揺すった。脚は石膏のように冷たかった。

——死んでいる！

そう思ったとたんに、阿部巡査の足がすくんだ。犯罪者の扱いには慣れていた彼も、死体にだけは慣れていなかった。しかも、死体を発見したのは初めての経験だった。彼が青くなって立ち上がり、駆け足で派出所へもどるまでの行動が、必ずしも敏速でなかったとしても無理はなかった。

「たいへんだ。」阿部巡査は息を切らして言った。「死体が落ちている。」

「死体が落ちている？」

派出所前に立番中だった大沢巡査は、勢いこんだ阿部巡査の気配に圧^{おさ}されて問い返した。

「そうだ。絵画館うらの林の中に、男の死体が落ちていた。」

「ほんとうか？」

「確かに死んでいる。いっしょに来てくれ。」

「あわてるな。あんたが見て死んでいるなら、わたしが見たって死んでいることに変わりはない。」

年かさの大沢巡査は、先輩らしく落ち着いていた。死体などはめずらしくもないと言いたそうな口ぶりである。

「それはそうだが……。」

阿部巡査の方はだいぶ興奮していた。

「殺してはいないだろうな。」

阿部巡査の顔色をみて大沢巡査は念を押すように言った。殺しとなれば、落ち着いてもいられない。

「わからない。外傷はないらしかったが、Yシャツにパンツ一枚というのはおかしい。自殺する奴ならば、もつと体裁を重んずるだろう。パンツは他殺の匂いがする。」

「幾つぐらいの男だ？」

「四十五、六に見えた。口ひげを生やして、メガネをかけている。」

「発見者は？」

「わたしだ。」

「そうだったな。」

大沢巡査は口をつぐんだが、顔色がしだいに赤くなった。

「とにかく、本署へ連絡しよう。殺しくさくなってきた。」

大沢巡査は派出所にはいると、荒らっぽい動作で送受器をつかんだ。

電話口の向こうに出た宿直の起番は、郷原部長刑事の声だった。

4

「九時半よ、三十分も待ったわ。」

向かいのボックスに腰をおろした宮坂朱月を見て、三輪子は鼻を鳴らすように言った。

「ごめんよってあやまったじゃないか。ちゃんと時間を計って出たんだが、途中で男の友だちに会っちゃってね、それが世話になったことのある奴で、逃げられなかったんだ。」

「男の、って断わらなくてもいいわ。お話があるっていうから、無理をして出てきたのよ。」

ふっくらとした受け口の、赤い唇をついて出たことは、相手の不実をなじるとも聞こえるが、相手に流す目の色をみれば、甘えかかっているとみた方がよさそうである。

三輪子の年はわからない、と誰もが言う。小柄なせいもあって、二十四、五の娘に見えるかと思えば、ふとした身のこなしに、三十代も半ばをすぎた女の色気を感じさせる。十九になる娘がいるが、これは先妻の子というから、彼女の年齢を判定する資料にならない。いつでも話題の中心にいて、すべての男たちに気がかりな思いをさせる女、それが三輪子だった。彼女が業界紙の婦人記者をしていたころも、彼女が野平電気社長の後妻となった後も、退屈な男たちは彼女のことが気がかりだった。彼女に小指一本触れたことのない男たちが、彼女は幸福だろうか、彼女は今でも美しいだろうか、などと噂をし合う。余計な心配は、ご苦労というばかりである。もし彼女を知る者の中に、いささかも彼女を気にかねぬ男がいたとすれば、それは野平電気の嘱託眼科医、宮坂朱月ただ一人だったかもしれない。

宮坂朱月は新宿区柏木で眼科医を開業している。朱月は俳号であって、本名ではない。野平電気社長の野平研造を知り、野平電気の嘱託医として迎えられることになったのも、俳句会でしばしば顔を合わせたのが縁であった。つまり当時の朱月は、俳句を作ることに熱心であったといえる。吉田白塔子の主宰する「青桐」俳句会に所属し、毎月第三日曜日の定例会には欠かさず出席していた。なぜあのころは俳句などに熱中していた